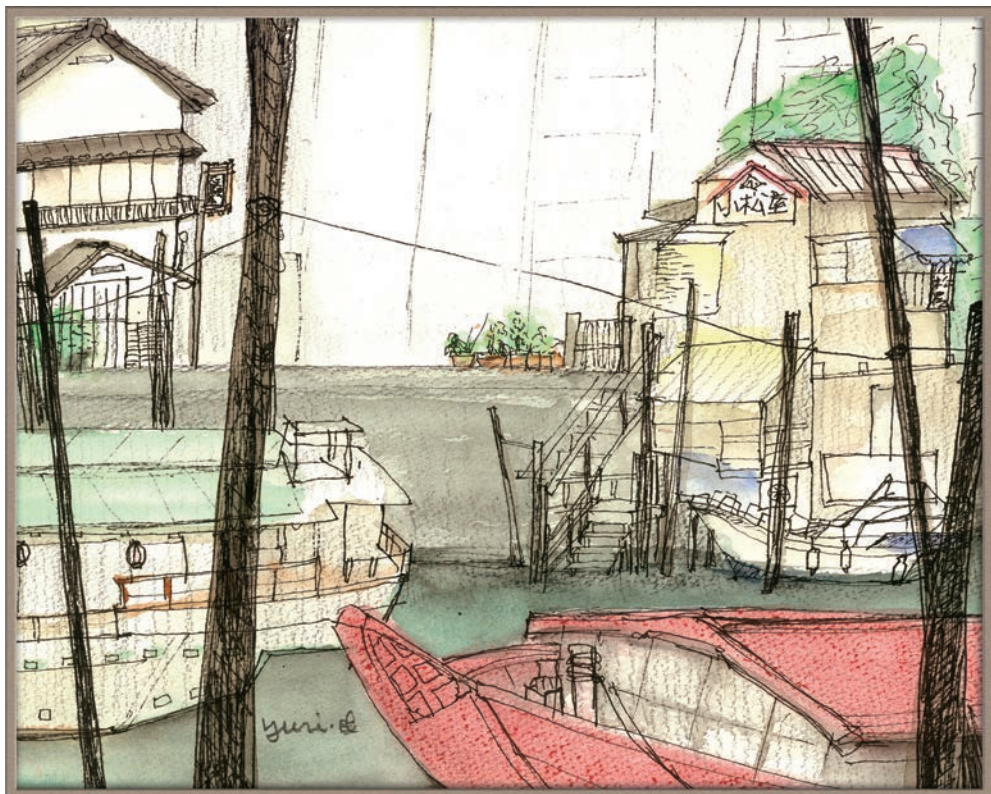


三河アララギ

平成二十八年

六月号

第六十三卷 第六号



ニューヨーク日記(116) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Amor y Amargo March 26, 2016

Blue Shoe Diaries



カクテルってそれほど好んで飲まないけど (いつもワイン!) 飲むときは甘くなくてビター系のカクテルが多いかなあ。ビターなカクテルを自慢とする小さな可愛いバー、Amor y Amargoがイーストヴィレッジにあるのを聞いていて機会がなくやっとな最近寄ってみました! 小さくてノスタルジックなバーでいい感じ。早速ネグローニを試してみたらやっぱり美味しかった! 色々な種類のビターも売っていて家でもカクテル作りたい人にはぴったり。今度は実際にビターの味だけでなくビターの入ってるカクテル飲んでみたい! (ネグローニは味はカンパリで苦めだけどビターは入ってません)

If you like bitters, you should go get a cocktail here at Amor y Amargo. Or even to shop for bitters! I am the type of person that likes bitter flavors so there's no exception to my preference in cocktails (though I normally stick to wine). My favorite aperitif is a Negroni. So despite that the Negroni doesn't actually use bitters (the bitter taste is from the Campari), I figured that a bar that specializes in "amargo" will make a fine Negroni. And they did not disappoint! A very intimate gem of a bar.

目次

第六十三卷第六号(通卷七五〇号)

表紙・柳橋

ニューヨーク日記(116)

ノボタンの窓

歌集「はゞきくさ」

歌集「草々」

熊本の

木花咲耶姫

御津山御津川

山里

竹の紅葉

鶯の声

牡丹の開く

三春滝桜

健やかな

あわれなり

ため息嵩む

母

花御膳

春爛漫

櫻さくらの

立浪草

われに散りくる

生きてゐる

歌集「夢のつづき」

『いこせせ』

今泉 由利(1)

Blue Stone(2)

御津 磯夫(4)

大須賀寿恵(5)

今泉 米子(6)

岡本八千代(7)

今泉 由利(8)

弓谷 久子(9)

青木 玉枝(10)

内藤 志げ(11)

林 伊佐子(12)

安藤 和代(13)

鈴木 孝雄(14)

清澤 範子(15)

足立 晴代(16)

阿部 淑子(17)

伊藤 忠男(18)

森岡 陽子(19)

白井 信昭(20)

近藤 映子(21)

杉浦恵美子(22)

山口千恵子(23)

夏目 勝弘(24)

水上 信子(25)

いーはとぶ(26)

牧原 正枝(26)

石田 文子(26)

現代学生百人一首

森 厚子(26)

山崎 俊子(26)

三田美奈子(26)

水野 絹子(27)

牧原 規恵(27)

稲吉 友江(27)

鈴木美耶子(27)

吉見 幸子(27)

東洋大学(28)

大友 里那(28)

小泉 俊喜(28)

荒瀬 捋文(28)

安ヶ平隆介(28)

佐藤 楓(29)

佐藤 瑞穂(29)

阿部 蒔史(29)

大場 美鈴(29)

夏目 勝弘(30)

近藤 映子(30)

森岡 陽子(31)

森岡 陽子(32)

松本 周二(32)

田中 清秀(32)

重野 善恵(33)

今泉 由利(33)

米田 文彦(33)

柳田 皓一(34)

山元 正規(34)

山迫 京子(34)

植村 公女(35)

田中 清秀(36)

丸山酔宵子(38)

本からのあれこれ(7) 米田 文彦(40)

ある自然科学者の手記(49) 大橋 望彦(42)

絹の話(67) 今泉 雅勝(44)

短歌に詠まれた茂吉 五十七回 鮫島 満(46)

楽しい時間(43) 山本紀久雄(48)

「楽しくマナー」(12) 辻 照子(50)

『歴代天皇御製歌』(五十七) 貫名海屋資料館(52)

童謡「大きな木はいいな」(五十八) (53)

高橋 育郎(54)

「佐渡が島」を地図に辿る(2) 夏目 勝弘(55)

「氷魚」のことから(185) 岡本八千代(56)

ことのはスケッチ(450) 今泉 由利(57)

編集室だより(二〇一六年 四月)

和菓子街道(116) 三河アララギ(58)

お知らせ「三河アララギ」について(60) 平松 温子(59)

ノボタンの窓（昭和二十九年〜昭和四十年） 御津磯夫

薬だけで治るものにはあらぬこと一人一人に吾がくりかへす

夏の夜の二時間ばかりをよそほへる月下美人にあふいとまなし

おのづから実生の梨の実おつるまでわが裏庭の荒れたるたのし

わが庭に巣くへる一羽の山鳩はあさの光のさす枝にゐる

一枝を喰ひつくしたる毛虫らは毛をたてしまま黒くかたまる

白妙のダチュラの花のむらがり光あつまる秋の夜の月

ほろびゆく石のおもてに平行に光ながれて右みなど道

みなどとは三河の御津の港なりしいにしへ彫りしみちしるべ石

黄素馨ののこれる花の秀を折りて手わたしたまふ門のみぎりに

冬葵の花はひそけし淡々し雅き丸葉のかさなるかげに

歌集「はゝきくさ」II

大須賀寿恵

手押しポンプに水汲む音の聞こえつつ万葉五首の輪読すすむ

会議終へ来りし吾の机の上に木曾馬籠よりの土産の手毬

一羽のみ屋根にとまりてゐし鳩の番となりて飛び立ちてゆく

わが仰ぐりんごの木にはりんごならずのぼりてゆきし夕顔の咲く

腐れ落ちてざくろころがる八丁裏曲がれば吾の県事務所なり

この母心千人の児にも持ち給へと吾は話の結びとしたり

行政監察庁の指示にたちまち事務室の机はなべてスチールとなる

朝夕を足萎え吾の渡り越ゆる御津駅のブリッジ四十八段

京都にて学びし技術に作りしと添へ書をして緑茶届きぬ

二才の吾れの病み危きに断食して祈りしことも父の日記に

歌集 「草 々」

今 泉 米 子

アンデスのリヤマのかるきセーターを着たればしばし胸張りてゐつ
たまさかに出でて庭山にあてもなく松ぼつくりを拾いてゐたり

病みし年を送るよころびこもらせて苔の上におく信楽の甕

孫二人国分尼寺の裏山のをなもみめなもみ付けて帰り来

たのみゐし日曜もはや夕茜古語辞典朱のボールペンなど探しつつ

よろよると風邪の床より起き出でて夫の夕べの牡蠣汁を煮る

雨水の走りし路に滑りつつ山の石佛をろがみもせず

冬の土白く乾ける民部坂今日は超えゆく老のあそびに

三月の夕べは長し坐りゐて夕餉の後の静けさをきく

熱きスープ飲みあへる間も濠端の柳のみどり増しゆくごとし

熊本の

蒲郡 岡本八千代

熊本の地震はつひに連鎖して今なほ山の崩るる音すと

天空の人となられしは十年前今こそ想ふ熊本の先生

その人の名前は園田日出子さま海軍工廠しやうの寮長先生

白秋の柳川やながわにまで行きたるに日出子先生に逢はず帰りき

西浦まで熊本の風吹きくるのか庭ウツギの空木の白花ゆれをり

春風の冷たく強く吹きすさぶわが老いらくには毒の風かな

キラキラの黄金糖を口くちに含み今から静かに本読まむとす

やはりまた「ノボさん」の本読まむとす子規と漱石の出逢い求めて

朝早く花火の音の一つ大き目覚めて今日もわれのあるかな

自立して働きてゐる写真の孫やれやれと見るその男らしさ

木花咲耶姫

東京 今泉 由利

この年の最も小さき満月の光りに委ぬ私をひとり

三味線のバチにも似たり種実つけ咲きのぼりゆくなすな薺白花

いづこよりまろまろまろし花びらの流れきたりぬ私の窓

花びらの降りくるところ降りつづく遠く来たれる人を待ち待つ

富士塚の急階段をかけたのぼるまみえむとして木花咲耶姫

夢かしら一富士二鷹三茄子辿りゆく道歩みの先に

もふすでに尖がる筈実を天に向けカラスノエンドウスズメノエンドウ

ツタンカーメンの棺の中にも有りといふ矢車草は青く咲き初む

盆栽のヒトツバタゴを前にして深山大木なんじゃもんじゃを

万葉の黒人詠みき安礼の崎ここに生まれしここに育ちき

御津山御津川

豊川 弓谷久子

農道に佇ちて眺むる御津山桜我の一人の花見の上席

御津山がすべて我の視野の中四月の風と満開の花

御津川のほとりに住みて四十年今年も仰ぐ御津山ざくら

黒ければ目を凝らし見る御津川に鯉泳ぎをり数知れぬ程

蒲公英の花一面に咲く草地人無きがよし我が散歩道

被災地に又も無情の雨が降る意地悪天気と空を睨みぬ

八丁味噌つけてかじらむ産直の取れ立て胡瓜みずみずしきよ

たつぷりの糠にてゆつくり茹で上げむ金野の藪の筍届く

パジャマ一着一日かけて縫ひ上ぐるおはぎ頂きし礼とせむ

友禅の着物一枚解き終る為す事あればひと日短かし

山里

新城 青木玉枝

夜の更けを目ざめてしばし窓際に星空見上げ故里恋し

山里に何故来たのかと悔いの日び都会のリズムに帰りたい

莊の庭きれいな花の鉢並らぶ知らない花の名前をききて

庭に出で春のかすみの山並みを故里しのびてしばらくは立つ

山里に二年の歲月住みし今帰りたい思ひ夜毎の夢に

今更に悔んで枕をぬらす日び後悔反省楽しみは何処

山里も弥生すぐれば木も草も若芽を出して青き行列

山里の四季の流れをこの目にて心ゆくまで見るる嬉しさ

音一つきこえない夜の静けさにこれが山里の夜かしらと

枯原も何時しか青き原になり今朝は蝶三羽ひらひら舞ひて

竹の紅葉

豊川 内藤 志げ

微睡みの間に雨の降るらしく沙羅の薄葉に雨の粒載る

窓よりの沙羅の薄葉の雨の粒風に揺れつつ見えなくなりぬ

びっしりの雨の雫に垂れ下るそつと持ち上げ朝の坂径

種生姜分け折る時に音のたつ生きいる証と教へられつつ

紅の牡丹の花の咲きほこる朝よりの雨傘さしやらむ

紅の牡丹の花に西の風くづれむばかりに花の揺れ揺れ

咲きほこる牡丹に西の風強し花ごと揺るるも一片散らさず

尾も首もほっそりとした何鳥か荒ぶる西風の日芝生に遊ぶ

東風こちに揺れ竹の紅葉はさらさらとひらひらとわが庭に散る

わが庭のたたきに散りし竹紅葉さらさら舞いて物陰に寄る

鶯の声

岡崎 林伊佐子

鶯の初鳴き声を夫と息子が真似つつ教へぬ耳遠きわれに

鶯の声に目覚めし若き日も懐しく思う突発難聴

帰省して裏山の太き櫨の木に梯子をかけて若芽をとりぬ

雑草とおもへど美^はしきほとけのざ玉ねぎ畑に彩どりて咲く

玉ねぎの畝間にひそむ蛙の子姿も色も蚕豆に似る

春耕にひとり働く共同畑黄鶺鴒のきて杭^{くわい}にさえざる

西瓜畑に虫よけに植えるマリゴールド農薬つかわぬ自然栽培

西瓜の蔓のびきて初花さく畝にネットを張りぬからすの偵察

花の苗野菜の苗を育てゆく無料配布のたのしき仕事

庭すみに影をおとさぬ緋牡丹の七つの花が花びらかさねる

牡丹の開く

豊川 安藤 和代

回覧板回す隣の庭は早やカサブランカの頭がのぞく

押し寄する波の様なる悲しみをこらえて夫に「大丈夫よ」と言う

元気なる夫と見た桜は輝けど今日の桜は泣く様に見ゆ

両の手で頬をビシバシ打ちてから笑顔つくりて病室に入る

今の世の医学信ずるも病室を出れば全身不安がおそう

看る者も病む人は尚悲しけれ負けてなるかと奥歯かみしむ

院内の喫茶で夫とのひとときはちよっぴりお洒落にローズブレンド

新薬のつぎつぎ出来てありがたし保たれている夫の命よ

透し百合五本日増しに芽の伸びて苦しみ悲しみ慰めくるる

庭に咲くどの花よりも風格をどっしり構えて牡丹の開く

三春滝桜

沼津 鈴木孝雄

春戻りソラマメの先にアブラムシまた始まった虫との闘い

山腹の所々にオオシマザクラ鷲頭山にも春訪れり

法多山鶯啼きて春がきぬ厄除け折り桜団子食む

この春は桜の咲き順樹々差多し花前線も北から南

満開の桜に囲まれ鶴ヶ城戊辰戦争の悲劇にも耐え

満開の花を支える太い幹雄々しく生けり三春の滝桜

時ならぬ雪のお陰で雪見風呂高湯玉子湯硫黄の漂い

桜散り白く輝くハナミズキ日米の絆先人の想い

暴風雨芽が出たばかりのインゲンを襲う塩害ジヨウロで水を

八重桜モッコウバラにツツジ咲く春は花まで落ち着く間もなし

健やかな

春日井 清澤 範子

爽やかな風にひらひら舞ふ桜木々の間を吹き抜けてゆく

バイクの音ありて新聞受け取りぬ玄関に出づればサワサワの風

休日の朝の時間を楽しみて床にて鳥の声聞いてゐる

忘れはつ文字多くして書き泥む辞書にルーペを横に置きつつ

向ひ風やや強く吹く散歩道夫の手握り歩幅合せて

学童の居ぬわが家なり夫はいつも校区の廃品回収に参加

孫なくも校区の廃品回収に新聞束ねて児童に渡す

血圧の高き夫の健やかな寝息のリズムに安堵してをり

洗濯の物干すたびに仰ぎ見る柿の若葉の光りてまぶし

一日の塩分十グラム保たむと麴のかけ汁半分を捨つる

あわれなり

東京 足立 晴代

遠近あちこちの春の訪れうららかに盛りも散るもとりどりにして

世界に誇りて熊本城日々崩れゆく姿あわれなり

激しきゆれの重なりて屋根なきところ人集まれり

山くずれ流れくる土砂家を呑むなすすべもなき人の弱さよ

過ぐる歳楽しく旅せり幾く度か想い出多く心に残りて

石畳たたみ踏みしめながら歩む坂水なき堀の橋の上の櫻

早霞の床に「ドン」と云うテレビに映りし熊本の災事

天災の続きて列島変りなき菜畠続く春の訪れ

花散りて若葉の陰に梅の実の丸く育ちて額並べたり

刈かり込みて影ひそめたる熊笹の遠慮深かげに小さき緑葉

ため息^{かさ}嵩む

横浜 阿部 淑子

爛漫の桜の花にも祝われて親子手つなぎ入学式へ

雨風^{あめかぜ}の激しき中を耐えぬきて青空に映ゆ満開の桜

七分咲きの桜に見とれつ池の端清き白鷺佇んでおり

北海道の新幹線の開業で北の大地に歓声こだます

熊本の余震の数は群をぬき現地の報にため息^{かさ}嵩む

母
大阪 伊藤 忠 男

看護師に幸せだったと言える母覚悟の言葉にほっとするなり

長生きの秘訣何かと問うこたえ「家族」と言われまたまた涙

荒い息言葉も出ぬか苦しげな母を見つめる辛きその時

聞き取れぬ最後の言葉ありがとう妻は必死に唇を読む

あの世でも数独解いて応募する母は変わらぬどこにいたとて

白百合の花に包まれ行く小道野辺の送り日背に受けながら

眠られぬその日だとして鶯の庭で鳴く声変わらぬ夜明け

秒針の打つ音響く通夜なれど時の流れは見えぬものなり

人ひとりこの世去りても何一つ変わり無きかなこの人の世は

悲しみに暮れる日々など望まぬか前に歩けと母叱る声

花御膳

東京 森岡陽子

昨日迄あれほど堅い蕾にて土手の桜の突然五分咲き

庭園をぶらぶら巡る回遊式灯籠石橋春の花

シルバーカー押しして微笑み歩く母桜の下をゆつくりゆつくり

花御膳桜の書かれた箸袋母は記念の土産と握る

長閑なる大川端の長命寺桜餅包む三枚の葉葉

初蝶は多摩川土手をたよりなげ黄色の羽もまだまだ小さき

花筏川の流れにゆるゆると隅へ隅へと固り行きて

子供達散った花びら集め来て花合戦と二手に別れ

布袋花びらパラリ紛れ込む花見帰りに風吹きはじめ

春の雪白梅にはよく似合う桜につもる雪は似合ぬ

春爛漫

豊川 白井 信昭

戴きし「三河アララギ賞」のお茶碗にわが胸いっぱいの幸に包まる

カラシナの黄を彩る農道に犬を引つ張り風に吹かれて

み社の玉垣に沿うひと処枝垂れ咲く桜日に三度来たり

隣家のわが待ちゐたる桜木の今朝降る雨にほころびにけり

ラグーナに見渡す山並み悉く春爛漫と彩る桜

幾万の花びら浮きて音羽川雨降る中を花筏くだる

青空に巻層雲の広がりて妻との遠出は設楽原PAしたらばらパーキングエリア

新城インターチェンジにICできてより竹広の景色大きく変はりぬ

戦国の強者つわものどもが夢のあと馬防柵見る絵図の中にある

吹き渡る緑の風の心地よし信長戦地本陣跡に

櫻さくらの

名古屋 近藤映子

見降しの櫻は正に満開の卯月の空は花曇りなり

八階の我ベランダに櫻花舞い上り来て走りてをりぬ

朝の日は東のビルの間隙に昇り四月まだまだ冷し風

四月とて日差の色より尚冷えて今だにコート手離なせぬ

見降しの川の堤は春めいて草々薄緑色の生き生きと

春らしく「ラナンキュラス」「カランコエ」「ペチュニア」「ベコニヤ」の鉢並べ

野の草の如く生きよと明治の父は吾昭和に生れ平成に八十歳となる

細葱の根っこを植えしプランター小さな葱坊頭のふくらみぬ

室内の水槽出たる亀二匹我八階のベランダの主

我八階の東の空は住宅ビルの建ち朝日の昇る姿を消しぬ

立浪草

蒲郡 杉浦恵美子

熊本に何故旅を思ひしか夫と来しとき城を見ざりき

熊本城天守の瓦崩れ落ち我が訪ふ機会遠ざかりゆく

夫逝きて震災過ぎて五年経て熊本地震を亦みようとは

駅構内定期券求める人の列そうか今日から新学期

現役を離れて五年あの頃の山積仕事は何だったのか

生徒等や教材研究二の次の雑務に追はれし教員生活

雑草と云はれしものの立浪草碧紫色なるその色愛づる

我が庭にこの花無ければ立浪草十本ばかりも戴きて来ぬ

立浪草名付けし古人がしのばるる小さき庭に小さき波頭

書留の封筒の束捨てられぬ仕送り呉れし親は居ぬのに

われに散りくる

豊川 山口千恵子

蛇行して長く続ける音羽川桜の下を長く長く行く

風もなき昼に時折花びらの一片二片ひらわれに散りくる

風吹けばはらはら散りくる花びらを受けつつ歩く音羽川堤

この橋を渡れば御油の松並木引き返しきぬ桜の下を

兩岸の桜太木の満開の下を音羽川逆のぼりゆく

ひとときに咲きてひとときに散りてゆく淡きピンクの桜の花はな

小松菜も白菜もすべて花の咲く黄の花鎌に切りたおしゆく

窓の辺の小さき鉢のフウランに水をやりをり君からの物

ビニールのおほひを取りて掘り出しぬ冬を越したるまるき里芋

四キログラムの種いも今年うねは植ゑにけり北アカリ一畝男爵一畝

生きてゐる

豊川 夏 目 勝 弘

かかりつけの病院もてとのニュースあり二年に一度の病院に来ぬ
雷鳴のひびくがごとし詰りゐる耳垢を吸い取る数分の間

天使の声きこえてくるよな気分なり街の騒音にしばし立ち居り
救急車そこのけそこのけ過ぎ去りぬさて電車にて帰りて行かん

夜半をすぎ雨音大きくなりてきぬ竹の子掘れると闇にめぐらす

竹藪を渡る風音さやかに聞く竹の子を探す木漏れ日のなか

土を割り出でし穂先の曲り見て太き竹の子の根本を予測す

竹の子を掘る手を止めて唐鍬の柄に寄りかかりチョット休憩

この朝も竹の子入れて味噌汁に今年の春を楽しみてをり

白菜は一日一葉のみ使ふ冷蔵庫にて花茎の伸びる

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

花をたずねなじみの道の庭めぐり山盛りに咲く木蓮の花

花びらのしきりに降りてグラスにもひとひら浮かび小さき宇宙

酔いのままタイムスリップ夢の中いとしき人に会える夜もあり

目を閉じて夢のつづきを待つ闇に一番電車の音近づけり

太極拳舞う手に緑したたりて昼の公園すがしきひととき

緑こき櫟の大樹その下で太極拳舞う唯我独尊

空ありて山ありてわれは迎えられ若きにかえり涙こぼるる

列なして赤き実つくるななかまど祭りのごとく街をいろどる

背筋伸ばしまだ大丈夫かと問いかくる鏡よ鏡うぬぼれ鏡

大鏡壁にかけたるその前を歩きつ戻りつわたしが二人

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

本当に二万分の一に娘ゐるかウイメンズマラソン録画をしたし
どれほどの出場倍率かウイメンズ走の娘のゼッケンM31370

牧原正枝

腰痛の治りおそきを嘆きつつ君は廊下にりハビリはげむ
妹のかけてくれたる長電話同級会出席をただ言ふばかり

石田文子

明日からどうすればいいのと泣く母の声よ届けよこの亡き父に
父逝きて月命日となりし今日しだれ桜の花は満開

森厚子

花桃の芽ぶきふくらみ枝々に雀らははや囀りてをり
ひとり居の我と分かりてクイズ出す遠くゐる孫のやさしさ続く

山崎俊子

艶^{あで}やかに枝垂れ咲きをり樹の齢およそ八十年か祇園のさくら
薄紅の花のひとひらひとひらと目の前に散るこの夕桜

三田美奈子

咳止めともて囃されし金柑の鈴生りの実よ採る人も無く
信号を待つ間に揺する春の風海山空も我も目覚めむ

水野 絹子

雨降りて生き返りたるわが畑えんどうの花その濃きむらさき色
わた池にもらわれて来し大きな金魚六匹我が者顔よ

牧原 規恵

会場に歌声喫茶の歌流るああ私も今青春の中か
今日からは歩くコースを変へてみむ春の野に咲く花やさしくて

稲吉 友江

仮縫ひのブルーのドレスに袖通す鏡の中に違ふわれかな
おだやかに春の光のそそぐけふ遠く住む友に誕生日メールを

鈴木美耶子

白浜のパンダに会ひにいくといふ幼らと乗るくろしお号の中
波静か白浜海岸そと漫る歩くはるか彼方に水平線見えつつ

吉見 幸子

現代学生百人一首

東洋大学

その笑顔本物なのか偽物か向けられるたび考えてみる

帯広北高等学校二年(北海道) 大友里那

内定が決まった兄の笑顔見て寂しさ隠し共に喜ぶ

青森県立八戸工業高等学校二年 小泉俊喜

八人の思いをのせたロボットがその手を伸ばす夢を掴みに

青森県立八戸工業高等学校三年 荒瀬 掬文

作業服使いはじめて三年目いい思い出が着るたび浮かぶ

青森県立八戸工業高等学校三年 安^{やす}ヶ^が平^{ひら}隆介

震災の記憶を持たぬ人たちと同じ道行く小さな違和感

岩手県立盛岡第二高等学校二年 佐藤

楓^{かえで}

通学路寝ぐせが揺れるそよ風にノンフィクションの「今日」が始まる

秋田県立能代高等学校二年 佐藤 瑞穂

両親に進路聞かれて黙り込む聞かぬふりして空を眺める

山形市立金井中学校二年 阿部 蒔史

「んだ」「んね」「け」それで通じる山形弁会話になるとまるで呪文だ

山形県立北村山高等学校二年 大場 美鈴

私の一首

六坪余の空間のみが庭なりき枯れしアジサイとサツキの丸刈

夏目勝弘

長塚節の「我が庭」を読み、写生してみようと庭を見つめていたが、書けずやめた。

節の生家の庭は森となり、昼でも薄暗いそのなかにいると「シーンとした静寂」を感じ、しばし息をひそめていた。計測器での数値は違いがない静けさだと思うが、我が家の庭では感じられない。「シーンとした静寂」。

その「シーン」というのは耳のなかにある、常に振動をしている「ダンス細胞」の音といわれている。

その「シーン」という波動を感じたのは、自分の念と波動と共鳴したためか。それが感じるということだと思う。

寒き道通りすがりに香り来る街路樹の下咲きゐる水仙

近藤映子

もう五年も前の一首である。今年も夕刻夫を見舞ってバス停に降り、歩道を歩いて帰途につく、歩道の街路樹の根本に水仙が咲き出した。もう少しもう少しと夫の命を思うばかりである。思えば、もう八年九ヶ月前突然日

赤病院に入院したとの電話より、十三回の転院をよぎなくし、そして後、余命は今一ヶ月あるかどうかと言うところ迄、がんばって未だ「孫の顔を見なければ！」と言葉のまだ話せた頃が思い出されてならない。

灌仏会桜の道を品川へ釈尊の頭に甘茶をそそぐ

森 岡 陽 子

灌仏会は花まつり。釈尊の誕生を祝して行う法会。この日は私の誕生日でもある。丁度俳句の吟行日とぶつかり、桜の咲く中、仲間達に「おめでとう」と言ってもらった。何だか恥しく頬は桜色に成った気がした。次の日花御堂の水盤の中に立つ釈尊の像に小柄杓で甘茶をそそいで来た。ただこの頃は花まつりがどんな日か通じず驚く。昔は御釈迦様と同じ誕生日だと言えは通じたのにな・・・四月八日の花まつりだと。

『俳句』

名刹の石段高し木瓜の花

森岡陽子

夜桜や言問橋の串団子

白藤は弁財天の池の端

大寺の風鐸鳴らす春風

松本周二

山藤の荒々しくも咲きにけり

般若心経読み静かなる日永かな

雨音の雫となりぬ藤の花

田中清秀

ふくやかに青きみ空の八重桜

藤棚の花に隠れし鳥の声

将棋打つ音の在所よ藤の下

重野善恵

幾度も読書中断目借どき

藤の花垂れて昼餉のチャイム鳴る

ひねもすを花の香りのなかにをり

今泉由利

昼と夜を上手に分かつ春日和

一步ゆく一步近づく春の果

麗人の住む垣内や花海棠

米田文彦

みちのくの春豪快に滝桜

もの言はぬ花とて語たれ藤の花

里山の山藤の花見え隠れ

柳田皓一

藤棚の花の高さに手を伸ばす

藤の花これぞとばかり重く垂れ

仁丹の苦みにも似て春愁

山元正規

はじめての兔当番はこべ摘む

藤房の風生むたびの濃むらさき

乾杯はノンアルコール花の下

山迫京子

昨夜の雨房を伸ばして今朝の藤

宅配の弁当届く花筵

桜草の一鉢を下げ父の家

植村公女

終バスに乗りそこねをり花明り

つれあいの明日は元氣地虫出づ

旅果てのこぼしておりぬ春の泥

交差点の真中で止まり春三日月

花の冷え地図を広げて過ぎゆけり

筍の泥乾きをり夕の市

一人居音ひびきをり花大根

かさね吟行会

「東工大の桜」 四月

田中清秀

今月のかさね吟行会は佐藤喜仙さんの三回忌の法要としてご自宅に近い東工大大岡山キャンパスで観桜しながらの開催である。平成二十八年四月八日晴れ、絶好の吟行日和の暖かい一日となった。

東京工業大学は明治十四年に東京職工学校として設立、その後産業技術の近代化を推進すべく多くの人材を輩出して来ており創設百三十年の歴史ある日本最高の理工系総合大学である。学士課程に約五千人、大学院約五千人合わせて一万人の学生が学びその内一千二百人が海外からの留学生だという。

今、キャンパス内の桜は満開を既に過ぎ散り始めている。しかし校舎や運動場の周辺にはまだ見頃の桜が多く見られ十分堪能できる。とくに正門近くの広場では近隣の家族ずれや若者が集まりお弁当と飲み物片手に談笑するなど大いに賑わいを見せていた。

天も地もさくらの色になりけり 由利
キャンパスの足裏にやさし花の道 正規

喜仙さんは俳句への情熱少なからず私費を献じてかさね句会を主宰し熟年俳句の月刊誌かさねを発行、同人会員の作品を掲載し、また、吟行記や会員のエッセーを編集するなど元気に活躍しておられた。ところが一昨年突然病に倒れ思い半ばで心ならずも急逝された。今のメンバーは主宰に賛同された同人を始め入会を勧められた会員達で直接のご指導ご薫陶を受けられた人が多い。研究熱心であり知識豊かで持説を曲げない心がけは今も皆で語り合いそして研鑽の大きな支えとなっている。

山桜散りて恩師の三回忌 陽子
花筏葉陰と共に揺れており 素山
花吹雪ひと風吹きて吹雪けり 皓一

散りだした桜は校舎横の瓢箪池や通路の周りに吹きだまり、美しい絨毯の如く彩っている。鯉の泳ぐ池面を埋め尽くす花びらは緩やかに揺れている。

花散りて池面の空の薄曇

清秀

動かざるひょうたん池の花筏

京子

瓢箪池鯉の背に乗る花筏

さち子

陽気に誘われた親子連れ、その子供たちが花びらを集めて空に向けて舞上げる。もう一度桜吹雪となり散りこぼれる。微笑ましい姿が見受けられる。

小さき手の空へ放てり花の塵

文彦

花びらを集めてパーつと散らす子ら

善恵

狂う宵散る花びらが黒髪に

酔宵子

句会は大岡山駅の近くにある精養軒でおこない、昼食後の時間を延長して会場として提供して貰えた。献杯の後のほろ酔い気分の投句と選句は大いに盛り上がり三周忌の法要を兼ねた句会はいつものとおおり行われ無事お開となった。

その後で廻った校内の博物館には二億年前に生えていた巨木の化石「珪化木」が展示されていた。また、三十四億年前の最古の地球物質ジルコンを含む礫岩もある。これらは地下三十キロの地層にあるが地球の半径

六千四百キロから見るとほんの数パーセントの表層に過ぎない。解明されていないこの惑星の誕生の不思議さに思いが至るのも東工大のサイエンティフィックな雰囲気故であろう。

残桜を楽しみながらの吟行会の結びにかさね最終号に記載された亡き主宰の俳句を献じたい。

こころなし近くに見ゆる春の山 喜仙

■かさね吟行会■

日時 六月一〇日(金)

場所 大磯あたり・鳴立庵

集合 東海道線大磯駅十一時

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』(五〇)

丸山 酔宵子

『まぼろしの餃子・おけ以』

神田神保町は岩波書店、三省堂、小学館、集英社の本社とともに、古本の街として文化の香りの高い街である。宰相吉田茂に勘当された息子の英文学者である吉田健一が毎日通ったビールとから揚げの「ランチョン」、周恩来、孫文、魯迅も足しげく通った上海料理「漢陽楼」、大正レトロの居酒屋「兵六」など安くて美味くて趣のある店が多い。

今から40年前、まだバブルに至らず、田中角栄が「列島改造論」で颯爽と登場した頃である。大学をやっと卒業し、外資系の広告代理店に滑り込んで、一端の広告マン気取りで粋がっていたところである。ランチョンは有名でハイカラなビヤホールで、白い糊のきいた白衣に黒い蝶ネクタイしたランチョンのご主人が、ビールサーバー

から竹のヘラで泡を丁寧にかットしながら丁寧に注ぐのである。そのランチョンで吉田健一が美味しそうに飲んでいるランチョンビールを同じように偉そうに昼間から飲んでいた。

その頃、同じようによく通った餃子屋があった。中国では餃子といえば水餃子が主流で、その残ったものを鉄鍋に張り付けて焼いたことから、「鍋貼」(ゲオティエ)と呼ばれ、日本で棒餃子や鉄鍋餃子と呼ばれるようになった。「おけ以」の餃子はその伝統を踏襲した本格的な餃子で、昭和29年創業の伝説の店で、現在に至るまで餃子に関してはこの店の味に勝るものは無いまぼろしの餃子である。その当時の噂では、満州に派遣された有能な新聞記者が、命からがら日本に戻り美人の奥さんと始めたとのこと。頻繁に通ったころにはご主人は他界し、いつもきりつと着物に割烹着の品の良い初老の夫人が帳場に立っていた。店内では母親似的可愛い娘さんがてきぱきと超満員の店をさばっていた。

昼時では12時少し前に行っても、半端ではない行列が

できていて、11時半ごろか、1時半過ぎに行かなければ席は取れない。やっとカウンターの隅に席をとると、「餃子とタンメンそれと生ビール・・・」カウンターの大きな全面ガラスから見える広い調理場では、調理人達が所狭しと忙しく働き、高温で熱した大きな丸い鉄板を回すと、水蒸気が立ち上り、餃子が焼ける「チリチリ：ジイジイ・・・」と美味しそうな音が聞こえてくる。

小皿に醤油と酢そして特性ラー油でタレを作って待っている、こんがり焼けた羽根付きの餃子が運ばれてくる。パリパリとモチモチが同時にやってきて肉汁が口一杯に広がってくる。「ゴクゴク・・・、アーウメェー・・・」ビールから揚げもいいが、やはり美味しい餃子に勝るものはあるまい。

音たてる餃子に冷えたビールかな

酔宵子

(追記)

(一) 現在「おけい」は、経営権を譲渡し飯田橋に同じ味を限りなく踏襲して営業しています。

(二) ランチコンスタイルのビールをサーバーから注ぎ、ビールの生命線である泡を竹へらで丁寧にかットして出すのが本当の生ビールの飲み方です。今でもこの伝統を受け継いでいるビヤホールは、新橋の「ビヤライゼ」で、東京駅八重洲口にあった懐かしの居酒屋ビヤホール『灘コロンビア』のおやじの唯一のまな弟子が営んでいます。本当のビールを楽しみたい方は、是非「ビヤライゼ」にお越しください。お声をかけていただければ、ツアーでも組んでいつでも喜んでご案内いたします。

本からのあれこれ(7) 米田文彦

「駅前の本屋さん」

私の住む町の駅前にあった本屋さんも十年ほど前に閉店し、いつもシャッターが閉まっている景色になった。

この書店は奥で文房具も売っていて誰もが子どもの頃から出入りしていたから、経営者の親父さんが奥さんには頭が上がらないこと、一番気の強いのは眼鏡をかけた陰気な娘であること、その旦那はこれも気が弱いけれど、お金がない僕たち子どもの立ち読みは黙って見ていくれること、だけど何を訊いても要領を得ないこと、などを知っていた。

それほど大きな書店ということではない、ごく普通の本屋なのだが、漫画から受験雑誌、世界文学全集や辞書まで何でもあつたような気がする。区の図書館もあつたのかなかったのか、吉川英治の「宮本武蔵」も全部で六

巻だったがここで買った。小学生の私がレジに持って行って出すと、気の強い娘が「これは大人の本よ、おうちの方知っているの？」と言ったのを覚えている。吉川武蔵のどこが大人の本なのか分からないが、「うん、いいの」と答えたものだ。

吉川英治の三国志十巻も自分で買った。たくさんの英雄豪傑が出てきて面白いのだが、魏の張郃という強い武将が戦いで死んだのに、別の巻でまた何事もなく活躍しているのには「どうもおかしいなあ」と思った。両者とも鎖に鉄玉を付けた武器を使うのだから同姓同名の別人ではない。素直な子どもとしては作者が間違っただろうなどとは考えもしなかった。

正月にはお年玉を貰っているから少しは好きなものが買える。

漫画のロビンフッドを立ち読みして半分ぐらいまでも読み進んだとき、例の娘がはたきを持って、「立ち読みはダメだよ！」と怖かった。

その時はすぐに「これください」と言ったら、思わぬ

展開にまごついた娘が「え、そう、ありがとう」ということになり、子ども心にも気持ち良かった。

小学校四年生の頃、小遣いを何か月分か貯めたりしてアレクサンドル・デュマの「モンテクリスト伯」を買った。

白水社で全三巻。これはこの間まで書棚にあったが、流石に変色して読むに耐えず処分してしまったが面白かった。孤島の牢獄からの脱獄、金銀宝玉の箱の発見など巖窟王のお話の面白さとともに、トルコの山賊の洞窟での妖しげな女奴隷の踊りの場面など、おとなの世界の雰囲気だった。

電車の中で漫画を読んで、思わず吹き出してしまったて恥ずかしい思いをしたこともあった。あの本は何だったのか、あの魅力的な雪合戦の話、風邪で寝ている女の子と赤いリンゴ、あの話があった本は何の本だったのだろうか。

この駅前本屋のシャッターも先日ついに上げられた。「何

ができるのかな」というのが街の話題だったが、なんとコンビニが開店した。「なるほどね」というのがみんなの感想となり、その中に「あの本屋の家族はどうなったのかな」という思いが沈んでいた。

私も会社勤めの間は昼の休憩時間、外に出たときは束の間の息抜きに各地の書店に出入りした。

一番本を読んだのは独身赴任してまだ土地に慣れていない頃、岐阜・大垣の一年間だったような気がする。緊張から逃避する気分もあったのだと思うが、下宿は昔の曖昧宿だったようで、夕食後は大家の婆さんの部屋にたくましい男衆が集まってきて座布団で花札が散らばった。突然家に入ってきて「この娘なのだ」という女性に金を貸してくれと言われ、いくらか巻き上げられたこともあったが、婆さんに言っても「貸しちゃあだめなんだよ」というだけだった。

私もこうして大人の世界に入っていくた。

ある自然科学者の手記 (49) 大橋 望彦

『生・若・老・死』

3) 「中学校時代」(S 18・4・1) S 23・3・31)

中学校(獨逸学協会中学校)に入学、ドイツ語科に入る。当時独逸は、日・独・伊三国同盟といって、伊太利亜と共に友邦国であり、戦時下にあつても外国語としてドイツ語は自由に使え、ドイツ人のとても怖いザール先生(ご婦人)も教鞭をとつておられ、独逸のヒットラー・ユーゲント(ナチス少年遊撃隊)の話もされた。ドイツ語クラスは約百人近くの生徒が三クラス二分かれていた。英語科もあつたが二クラスしかなく、何となく遠慮しているような雰囲気があつた。中学の外国語は殆んど英語であり、ドイツ語を教えている中学は奈良にも一校あるだけであつた。一番初めに教つたドイツ語は、英語の「This is a pen.」と同じような、ダス イスタ イエン フーテ「Das ist ein Hut. Ist das auch ein hut? Neim, das ist kein Hut, das ist eine Muetze.」これは帽子です。これも帽子ですか。いいえ、これは帽子ではなく、学帽です。」といった文章の教科書だつたと思う。直にラッテン ファミリエRatten Familie(ネズミの家族)のような小文章から、二年生になるとシユトルム

の「イムンゼエImensee (湖)」などの小説を読むようになっていた。三年生の時には、ゲーテの「若きヴェルテルの悩み」等を読む様になつていた。翻訳することは、和訳といつたが、ドイツ語で書くことは、発表といつて、文法の実力が試された。

4) 「軍事教科」

教科に教練、修練、剣道、柔道、行軍、富士の裾野の野営、廠舎生活等が強化される。(配属将校、閲兵式……)。

池田配属将校は、痩せ型のスマートな神経質そうな軍人であつた。その厳格さは軍隊そのものを持ち込んできたような感じを受けた。容赦なくビンタが飛んだ。それでも格好が良かった。池田配属将校は、少尉か中尉の位だつたと思う。銃剣術が得意で、高学年の生徒と立ち会つて。びしびしと鍛えていた。

課外活動としてのラッパ班。(朝礼の国旗掲揚、行軍の先頭で進軍、野営の各種伝達等のラッパ吹奏)。

確か四年生の先輩に大橋君は音楽が好きだらう?と、言うようなことで勧誘されて、ラッパ班の班員になつたと思つた。その頃、原宿に住んでいて、近くに青山の近衛師団第四連隊の兵舎があつた。毎日、朝から寝るまで、ラッパの音がよく聞こえたのが潜在的にあつて、ラッパが吹けるようになった

らはいいなあ、と思つてしまった。しかし、大変な間違いであることが、後になって判つたのである。毎日放課後に、先輩達の特訓で、ラッパが吹けるようになつたのは非常に早かつた。下手するとビンタを喰らう程の特訓であつたので、緊張の連続であり、また、訓練の終わった後は、使つたラッパの手入れが厳しかつた。真鍮磨きにピカールと言う磨き剤を使う事はこの時知つた。指紋が付いていても叱られ、壁に二列に平行に並べてないと叱られた。

ラッパの音は、遠方まで届くのが特徴であるが、同時に訓練に来ている学校が沢山あると、お互いに間違わないように、必ず独逸学協会中学校のテーマ曲（「ブーアブ、ブーアブ、ブーアブ、ブーアブ」）を吹奏してから命令を吹奏すると言つた気配りが必要であつた。これは特に富士の裾野で行う野営訓練の時は必要なことだつた。命令の曲はどの学校でも、また、軍隊でも同じ曲であるから、もしもテーマ曲が無かつたらば、大混乱を来たしてしまうのだ。

ラッパ班は常に最初に行動をしなくてはならなかつた。集合する時は先ずラッパ班が集合して、「集合ラッパ」を吹くのである。それから全員が集合する。解散する時は「解散ラッパ」を吹くと全員が解散して行く。しかし、ラッパ班は曲の最後まで吹き続けなければ解散は出来ないものである。

「起床ラッパ」（起きろよ起きろ皆起きろ、起きないと大将サンに叱られる）も真つ先に起こされ、顔を洗い、正装してから吹奏に入る。「消灯ラッパ」を吹いて一日が終わる。行軍の時は、「集まれーっ」の号令でラッパ班が集まり「集合ラッパ」を吹く。そして隊列の先頭に立つて「進軍ラッパ」を吹奏しながら進軍する。休憩する時は「休憩ラッパ」を吹奏する。曲が終わる時には全員は既に休憩しているのである。まあ今では愚痴でしかないが、当時はきつかつた事を思い出す。一日に40km（10里）の行軍が毎日続くと、最初にバテルのはラッパ班であつた。通常は最低4名のラッパ手でラッパ班は構成されていたが、2名ずつが4小節で交替して吹奏する。1人のラッパ手が倒れると、そのペアのラッパ手は1人で吹奏しなくてはならなかつた。

朝礼では4名のラッパ手が合奏するのが建前であつた。しかし或る時、小生1人しかラッパ手がいないのである。電車の事故で3人が遅刻したのであつた。当然、国旗掲揚の「君が代」吹奏は小生1人で吹かざるを得なかつた。吹奏し終わったときは流石にホツとしたのをいまだに覚えてる。それでも、ラッパ班に入ったお陰で修練の成績だけは常に秀（秀、優、良、可、不可）を頂戴していた。修練で秀の成績は、とてもじゃあないが戴けない貴重な成績であつたのである。

絹の話 (67)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹の生産思想の誤算

〔付加価値のある絹へい〕

絹（家蚕）は古来から権力者や一部の金持ちの為に農民や各種職人が辛苦を超えて生産して来ました。しかし一部例外を除き、庶民が絹を着た歴史はありません。

庶民が着た絹は、農民であれば繭が出来る時、蚕が繭を固定する為の足場のフワフワした糸に包まれた毛羽（繭は毛羽をむしり取って出荷されます）が農家に残るので、それを紬いで自家用にして来たくらいです。

昭和40年も過ぎると薄く丈夫で安価な繊維製品に押され、顧みる人もなくなり、毛羽は農家の納屋の屋根裏に死蔵されたてしまいました。繭を糸にする製糸屋には生糸を採る時出るキビソと云われる絹糸屑（絹紡績の原料）が残りますので、これを紬いで着て来ました。

江戸時代には奢侈禁止令などもあり庶民が絹を着る事を禁じていましたので、農民や庶民は繭や生糸を作っても着る機会が殆どなく、繭は作れども絹知らずの状態が有史以来続いてきています。身分門閥など無くなった昨

今は豊富な衣料品の中で敢えて絹を着ようとする人は稀になってしまいました。多くの人は絹の着用感触を知らなく、絹は泡の様に軟らかく軽い物だと信じていて、オーガンジーなど麻だと思ひ、紡ぎくらいになるとやっと近親感を覚えるようです。にも拘らず、繭の生産指導は大形で細織度や蚕の様に光つたり、ピンクやブルーの色繭等々高付加価値のある繭を作ろうとされています。話題は作れても高価で絹が更に大衆離れしてしまいます。

和服を着る人が減少する中、少ない顧客に話題性のあるより高額な物を売り帳尻を合わせようとしています。スーパーやコンビニが大衆の支持を集めて成長している様に大衆を無視した産業は成長してゆかないでしょう。

木綿は江戸時代以前は大変高価な物でした、豊臣秀吉は倭寇を取り締まり、勘合貿易をして木綿の輸入によって利益を独占しようとしたが、江戸幕府は木綿の国内生産に力を注ぎ麻から綿へ大衆化により、より豊かさを実感する平和な時代をリードしたのです。

機能性をうたう化学繊維が溢れる中、木綿が何処の国で作られようが愛好家は衰えません。

一方、絹は明治以降昭和30年頃まで世界一の生産国でありましたが、その大部分を輸出に廻し、国内大衆化

を考えませんでした。絹の急速な衰微をまねいています。

【はからずも絹の大衆化来る】

昨今絹の機能性の研究が進み、保温、保湿、抗菌、緩衝、防紫外線、防臭性などの詳しいデータが絹製品生産者の間で常識化される様になり、絹は美しく着るばかりでなく、健康のために着てはどうかと云う動きが急速に高まり、靴下、各種インナー、シート、腹巻き、マスク、等々今まで考えられなかった分野に身近な絹商品展開がはじまり、その効果が口づてやネットで広がって小さな流れが出来て来ました。

販売はネットが主流で、如何なものかと思われる針小棒大な効果を謳う商品もありますが、もはやこの流れは消える事はなく、更に大きなうねりになって行くと思われれます。絹の大衆化がはじまろうとしています。

一般に、アウトターとしての絹の洋服などの購入は年配者が多く、若い人には絹と言っただけで、ストールすら敬遠されてしまいますが、新たな流れの品々は老若男女を巻き込んだ流れになって来ています。

しかし販売大手のデパートなどは殆どその様な話は無視して、絹の機能性をうたう事も好みません。百貨店は新たな商品開拓をしようと云う気概がありません。もつ

とも、百貨店には絹100%の物は殆ど売っていませんが。

【絹の大衆化で絹生産思想が変わる】

高級な和装に供する絹糸を作るには養蚕、製糸の大変高い技術が必要ですが、健康用品のインナーなど作るには繭が多少不揃いであろうが、世界のどの国で作らうが絹の機能性に変わりはありません。コストガからない繭生産が求められます。日本は従来の絹を海外援助で作らせようと何度もしましたが、殆どの国で失敗しています。高いハードルがなければ生産可能な国は多々あります。その国で繭を作り、製糸の上手な国で糸を作り、織りや編みはまた別な国で仕上げると云う国際的流通のグローバル化が大衆化と云うニーズによって形成されて行くでしょう。

絹の洗濯は綿の1/3回でよいので、省力、省エネにも役立ちます。防災の下着は絹に勝る物はありません。

この様な絹はドライクリーニングの必要ない事は云うまでもありません。絹のドライクリーニング表示義務は絹の販売を大きく阻害しています。洗濯表示は生産者の判断に任せるべきでしょう。

短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 五十七回

「月虹」 鮫島 満

十 五味保義 3

本稿は、本誌平成二十五年七月号「十 五味保義」の続稿である。

「聴禽書屋」の軒をうづむる高き雪ぎびしきさまは
今日来り見つ 『一つ石』昭和三十三年
空しき室立ちめぐり憶ふ君^せ迫めて高き雪は凍れり
亡き君につながる様々の身に沁みて今夜は眠る雪の
大石田

「雪の大石田」と題する一連中の歌。山形県の大石田は国内でも有数の豪雪地である。一連中には「最上川は雪七尺の高岸^{たかぎ}にみなぎり流るそのにごりはや」という歌があり「雪七尺」は毎冬のことであつたらしい。一首目の「軒をうづむる高き雪」は、ここでふた冬を過ぎた茂吉の生活をいやでも思わせるのである。

二首目は、茂吉が暮らした聴禽書屋に入ると二階の茂吉の部屋の窓に迫って降り継いだ雪が思われるというの

である。三首目は、この大石田に来ると何もかもが茂吉につながって思われる、そんな思いを胸に雪の降りやまない夜を眠るといふ歌である。

最上川のにごり寂しき雪の原はるかなる今宿^{いましゆく}の丘めざしゆく 同

「今宿」は茂吉が好んで足を運んだ場所である。時には、身辺の世話をした板垣家子夫を置いて一人で行った。本稿第十回でも述べたがこゝは、茂吉が「最上川の上空にしてのこれは未だうつくしき虹の断片」(『白き山』)と詠んだところでもある。この丘をめざして行く作者の目には「雪の国原南の方^{かた}の空ひらけ曇こひしき蔵王のやま」(『一つ石』)が見えている。作者は茂吉が没した昭和二十八年に大石田を訪ねた時も「今宿の方に乱るる夜半の雲川にしたがひ行くべくぞ思ふ」(同前)と詠んでいる。

鳴る川につきてくだれば君生れし家の石垣日^あをてりかへす 同

宝泉寺にわが入り来ればつやつやと幹光る菩提樹の下白雪

おくつきは春の彼岸の空気澄みはだれまぶしく光る午すぎ

「金瓶にて」と題する一連中の歌である。一首目初句の「鳴る川」は宝泉寺の裏手を流れる須川であろう。茂吉の生家近くの宝泉寺には、「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて垂乳根の母は死にたまふなり」（「死にたまふ母」『赤光』）を刻んだ歌碑が昭和四十八年に建てられた。この歌が詠まれたのが茂吉の生家なのである。

火葬場くわさうばのあとは田の中に小さくて黒き石沈むその枯芝に

この「火葬場」は茂吉が、「灰の中に母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり」（「死にたまふ母」『赤光』）と詠んだ場所である。茂吉はのちにこの火葬場について、「火葬場は稲田のあひだの凹処を石垣を以て囲ひ、棺を薪と藁で蔽うてさうして焼くのである。火は終夜燃え、夜の明け放つところにすつかり燃えてしまふのである」（『作歌四十年』）と解説している。茂吉のこの歌はのちの昭和五十七年に歌碑としてその火葬場跡に建てられた。

君が口述筆記してすぎし幾年かけふは気づくセンチ
ンス長くなり来しを 『小さき岬』昭和三十九年
逝く前の暑きふた月に日を次ぎて記ししをよむ今日

はつぶさに

このたびの疲れは常に異ると記ししより二十日の君が命

「アララギ」は大戦中の昭和十九年十二月号をもって休刊に入り敗戦後昭和二十年九月号から復刊するが、復刊の時から作者は編集人を務めた。茂吉が大石田から帰京すると茂吉との打ち合わせ、やりとりが多くなつた。茂吉は昭和二十五年十月に左側不全麻痺に襲われ、長年書き続けていた日記も家人が代筆するようになっていたので、作者の口述筆記はこの頃以前から始まっていたと思われる。家人の代筆による日記にも作者の名前が多く見られる。三首目は昭和二十八年二月二十日ごろの作ということになる。

みだれふりし昨日の雪の消えはてて青山墓地の石のかげろふ 同

茂吉が没したのは昭和二十八年二月二十五日であったが、青山墓地に埋骨されたのは六月四日であった。したがって右の歌はその冬か、その後の年の冬の作であろう。分骨は郷里、山形県金瓶の宝泉寺墓地に埋葬されたが、青山墓地よりも早い五月二十四日であった。

楽しい時間 43

山本紀久雄

2016年4月30日

フィリピン訪問（2）

フィリピンについて続ける。

前号で、ビールで有名なサンミゲルの本社を訪問したが、期待のビールの話はなく、道路工事計画の説明があったとお伝えした。

世界で酷い渋滞経験のベスト3は「エジプト・カイロ」「ロシア・モスクワ」「インドネシア・ジャカルタ」であったが、マニラも結構すごい。

構造的に道路整備状況が弱体なので、様々な方法を講じて渋滞対策を行っている。渋滞している車の中で、ガイド女性がいろいろ説明してくれる。

「マニラはどこでも渋滞で、インフラ整備が不十分。そこでナンバープレート番号で運転不能日を決めている。末尾ナンバーが1と2は月曜日、3と4は火曜日、5と6は水曜日、7と8は木曜日、9と0は金曜日、土日は全車OK。日本車シェアは85%。以前は95%だったが、韓国車が入ってきたのでダウンしたという。」

フィリピンのシャツは胸ポケットがないといい、自分のシャツで証明してくれる。ところで、フィリピンで交通事故によ

て死亡しても、50万円くらいしか補償されないといい。これは危ない。海外旅行保険に入ってフィリピンに旅行したほうがよい。

この海外旅行保険加入については、セントルークスメデカルセンターへ訪問時に、ここに常駐している日本人からも忠告された。簡単な盲腸手術で100万円かかるし、ちょっとした大きい手術だと1000万円は軽くかかるという。救急車を呼ぶと有料で7000円かかるという。」

仮に体調崩して救急車手配の電話をかけても、この渋滞では到着するまでには相当時間がかかり、病院につくまでに緊急事態ということが予測大だろうから、体の調子をよくしてフィリピンに行くことが大事だと思う。

渋滞の中、ようやくマカティ地区に到着したが、ここはフィリピンとは思えない整備された都市環境である。理由は、このマカティ地区開発はスペイン系の財閥アラヤが中心となつて行っているからとのこと。

今回、驚いたことにフィリピン政府退職庁長官自らが、我々に説明に来た。日本からフィリピンに移住しないかとのお誘いである。日本に23年もいたという日本語が抜群にうまい人物で、特に強調したのは、年金受け取りに額に税金がかかるらないということ。何故なら住所がフィリピンになるのである。さらに、ビザ取得で仕事も可能だと熱心に推奨する。

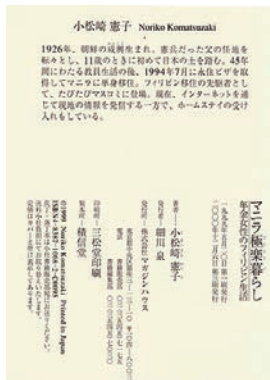
ちょっと気持ちが動いたが、自宅で可愛いベンガル子猫と生活しているので、猫の体調管理上、移住はしない方が無難と判断して、退職庁長官の話は真剣に聞かなかつたが、

ここで思い出した本がある。

それは『マニラ極楽暮らし』（1999年出版）である。

小松崎憲子さんが書いたもの。だが、恐らく小松崎さんの名前を聞いてピンとくる日本人はいないだろうが、フィリピンで長年暮らす年金生活者の間で、彼女の名前を知らない人はいないといっても過言でないらしい。小松崎さんが、フィリピンへの移住先駆者という。

「小松崎さんは海外年金生活者の草分け的存在で、日本人の年金生活者に与えた影響は大きいと思います。フィリピンに来た当初は定年退職した女性つて感じていたけど、会うたびに服装がおしゃれになり、段々と若返っていった印象です。日本では小学校の先生をやっていたので、生徒の両親や周りの目を気にしてやりたいように振る舞えず、フィリピンに来て二気に開花した感じでしょうか」（『脱出老人』水谷竹秀著）



ここで、突然、話題は変わるが、先日、とても楽しい体験をした。所属している経営者勉強会に参加し、たまたま隣同士となった方と雑談となつて、自宅の可愛いベンガル子猫が、住み着くことになった理由をお話した。

「娘の友人の実家が大阪で、そこで猫が4匹生まれ、その写真が届きました。写真の猫があまりにも可愛いので、娘が出張途次に猫を見に行ったら、ますます気に入つて、持ち主に頼んで、雌猫を二匹抱いて新幹線で運んで来たのですよ」と。そうすると、隣の紳士も「実は、私も雌猫を飼っています、今8歳です。家族3人暮らしですが全員猫が大好きで、猫中心の生活をしています」との答えではないか。



というわけで、しばらく猫談義して「ところで自宅の猫のお名前は？」と尋ねると「ミーコです」との答え。びっくり仰天、当家の子猫も「ミーコ」なので……。すると急に紳士は名刺を差し出したので、当方も差し上げたが、紳士は代表取締役会長で「次の勉強会でもお会いしましょう」と握手。今は猫ブーム。男の話題にも猫が出てくる時代だと思つた次第。

楽しくマナー (12)

辻 照子

「ワインで乾杯」

葡萄の花が咲いて約90日後に葡萄を収穫しワイン造りが始まります。

猿が木のうろや岩石のくぼみなどに蓄えて置いた果物や木の実が自然発酵したものを猿酒といい、山ぶどうには天然の酵母が付着しており発酵しワインとなります。

狛師や木こりが良い香りのする猿酒を発見し改良したのが、ワインの原点ともいえます。

緑が豊富で国土の多くを山林が占める日本は肥沃な土壌と水に恵まれています。湿度が高いため棚の葡萄畑が主流です。ヨーロッパでは拳ほどの石がゴロゴロ有る葡萄畑が多く通気性はあるが保水力はなくあまり肥沃でないで、根が水分を求めて土の中深く伸び、たくましく育ち甘く美味しい実をつけるので、葡萄の栽培には適しています。

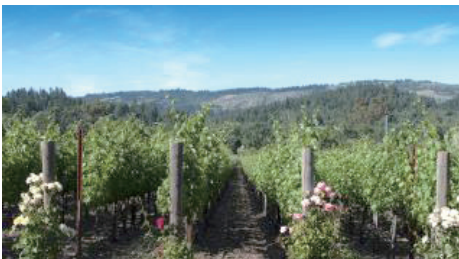
乾燥している畑では、湿気のカビや腐敗を防ぐために棚を作らなくても栽培が出来、収穫するのも容易です。

ロスアンゼルスから西海岸に沿って沢山のビーチ、有

名なサンタモニカその先のサンセットの美しいラグナビーチの近く、オレンジカウンティに住むアン・ジャック夫妻とロス在住の次女とともにハロウィーンが近い10月にワイナリーが点在するナパバレーやフリーウェイ沿いの広大な葡萄畑が延々と続くなかをドライブし幾つものワイナリーでワインを試飲しました。

カリフォルニアの葡萄栽培の歴史は18世紀にスペイン人宣教師がミサの祭壇で使用するワインを生産するために葡萄の樹を植えたのが始まりで、その後1919年から13年間の禁酒法でミサで使うワイン造りは許されたいが多くのワイナリーが破壊された苦難の時代もありました。

1976年、パリで開催されたワインテースティング大会 (Paris Wine Tasting of 1976 / the Judgment of Paris) で名だたるフランス生産者を抑えて白・赤ワイン双方の部門でカリフォルニアワインが1位を獲得した事により名門のフランスワイン (ムートン・オー・ブロン等) よりも高く評価されて以降カリフォルニア



ワインは世界的に注目されるようになり、手頃な価格で最高の味を楽しめると愛されています。

カリフォルニアは気候に恵まれ、安定したワインが製造でき「ハズレ」が少なく、フランスより暖かなカリフォルニアは酸味は少ないが糖度の高い葡萄が収穫されるので良質なワインが製造されるのになづけます。

訪れた各国の葡萄畑に薔薇が植えられているのを見かけます、害虫は葡萄の樹につく前に薔薇につくので害虫駆除を早めに行うことが出来、デリケートで病害虫に弱い薔薇がセンサーの役目をしてくれ、観察していれば葡萄を守るわけです。栽培技術が進んでその必要がなくなつた今でも多くのワイナリーが薔薇を植えています。

*マツシユポテトのビーフ巻き

材料 (4人)

牛薄切り肉16枚 玉ねぎ1/2個 ジャガイモ3個
ポロセスチーズ(1cm角切)8個 カボチャ(5mm薄切り)
8枚 塩・胡椒少々 サラダ油大1 オリーブ油適宜
作り方

①ジャガイモはレンジ(1000g)2分かけマツシユして中に、みじん切りの玉ねぎをサラダ油で炒め加え塩・胡椒を入れ混ぜ冷まし、8等分にしチーズを入れ丸め

る。

②クッキングシートにカボチャを並べた上に①をのせオリーブ油を塗り、190℃のオーブンで15~20分焼く。

*塩麴漬け春キャベツ

材料 (4人)

キャベツ 400g A(塩麴大3 ごま油大1 胡椒少々)
作り方

①キャベツは3~5cm角、芯は薄切りし、ビニール袋に入れAを入れ揉みこみしんなりさせる。

*キャロットライス

材料 (4~6人)

米2合 人参1本 昆布茶小2 白ごま大1
作り方

①米をとき炊飯器に入れる。
②スライスした人参と昆布茶を①に入れ分量の水を加え炊き、白ごまをふる。

ロイヤル マルソー(赤) ムスカデ(白) ソービニョ
ンブラン(白) のワインを試飲しました。

「歴代天皇御製歌」(五十七)

賈名海屋資料館

「花園天皇」第九十五代・在位一三〇八年(十二歳)・一三二八年(二十二歳)「持明院統・第四代」

花園天皇は、伏見天皇の第四皇子。後醍醐天皇に譲位のあと、仏道に精進され、和漢に通じ、ひたすら学問に励まれた。日記に「花園天皇宸記」、「誠太子書」を残された。

北條高時が、鎌倉幕府の第十四代執権職に就任し、鎌倉幕府の末期が近づく。

春雨

あさみどりみじかき草のいろぬれてふるとしもなき庭の春雨

貞和百首の中に

蘆原や正しき国の風としてやまと言の葉末もみだれず

(新千載集)

神祇を

神風にみだれしちりもをさまりぬ天照らす日のあきらけき世は

(風雅集)

花園院宸記の中に

世の中にいつわる道のたつならば正しき神をたれか仰がむ

(花園院御集拾遺)

「歴代天皇御製歌」(五十八)

貫名海屋資料館

「後醍醐天皇」第九十六代・在位一三二八年(三十一歳)・一三三九年(五十二歳)

通称「大覚寺統・第四代」 通称「南朝・初代」

後醍醐天皇は、後宇多天皇の第二皇子。二十二年間の在位。

天皇の衰微を憂慮され、王政復古を目指し、鎌倉幕府打倒に徹されたが、後醍醐天皇による「建武中興」も、挫折。吉野山に難をのがれられたが、後村上天皇、長慶天皇、後龜山天皇、吉野朝五十七年間にわたる、いたわしい御生活をされた。

急くなる秋のきぬたの音にこそ夜さむの民のこゝろをも知れ
世をさまり民やすかれと祈るこそ我が身につきぬ思ひなりけり

(新後拾遺集)

おのづから人の心の隈もあらばさやかに照らせ秋の夜の月
くもりなきためしと見てぞ秋の夜の月にも分きて心とゞめし
涙ゆゑなかばの月はくもるともなれて見し世の影はわすれじ
こゝにても雲居の櫻さきにけりたゞかりそめの宿とおもふに

(新葉集)

(新葉集)

童謡 『大きな木はいいな』

高橋育郎 作詩
白井雅樹 作曲

大きな木は いいな

大きな木は いいな

大きな木は いいな

わかばが ひかって

そよいでる

あおばが こんもり

すずしそう

はっぱが きいろや

あかになり

うれしいのかな

あせをかいたね

ああ きれいだ

たのしいのかな

やすんでゆこう

ああ うつくしい

風がさやさや

うたっている

ゆうだちザアツと

ふってきた

みんなではくしゆを

してあげよう

「佐渡が島」を地図に辿る(2)

夏目勝弘

節が美人さんとしか表現しなかった、その美人さんを、昭和四十二年四月に柳生氏が尋ね調べた事を書き出してみる。

小木の「見掛の一番いい宿」それが本町通りの「かどや」であり、柳生氏が行った時には、薬局になっていた。

美人さんの名前は、八代つぎさんといひ、相川の佐和田町八幡に八十何歳かで健在であつたと、人と会うことを避け、土地の名士でも会えず、写真もないとのこと。

一美人

翌朝女が茶を持ってきて、二言三言いい交し三階に導いてくれた。三階は雨戸が閉めてあり暗い、女が南の雨戸を両手で力を入れてようやく二尺ばかりあげた時に女の手の平は赤くなった。女は岡を指して(アレは畑でございますが)や小木が大火になつたこと、そして此宿が真先に焼けたことを話す。

二尺ほどの雨戸の間で鉢が擦れあつたまま、女の話しを聞いていた。あまり近いので視線をそらす、其口には鮮かに紅がさしてある。このような経験のない節はただ兀然として女のいうことを聞いていた。

白い横顔を上げくと見守り、この優しい静かな浦を前にして何時も立つて居たい心持でいた。其時丁場より呼ぶ声がし、飽かぬ美人は三階より去つてしまつた。

赤泊の街道に出る所まで教えてくれると、三町余りを女と歩いた。電信柱から左へ曲るとそこから筋道で赤泊より外に行きようがないと言ふ。此の時もしみじみ美人だと心に深く思ひながら女

の姿を見た。

三南 瓜

佐渡への船で知り合つた博勞の住む大崎へ街道は小山の間に入り、小さな青田を過ぎ羽茂川に沿う、街道は峡間になる。

地図で見るのと飯岡を過ぎしばらく家が無く大崎に近づく当りより、点々とあるのみ。

路傍で仕事をしている桶屋に、博勞の家を聞くと少し戻つて高い所だと云う。少し戻つて坂をのぼる。

博勞が縁側で足を投げ出し、梨を嚙じついでいるところであつた。ようきたのうと大口を開き反歯を剥き出しながらいつた。裏の宿屋で別れて四日目である。

博勞は赤泊は案内すると、そして丁度赤泊に越後の仲間が牛を買いに来て明日あたりは帰るからその船に乗せてやるとのこと。

休息してゆけというので部屋にあがる、部屋の内は乱雑で、天井からは煤が垂れて居る。

棚は漆で塗つたようであり、棚には蝮蛇の皮が干してある。今とつた梨だとすすめるのを延びた拇指の爪で皮をむいてみた。それを見た博勞が汚い包丁を持つてきた。

梨はガリ／＼で石のようであつた。博勞の娘らしい十三四の子が南瓜を抱え入つてきた。

博勞が炬に火をおこしだし、娘が南瓜を切るが堅くてなかなか切れない。布巾で包丁の背に当て押しして二つに割り、自在鍵の鍋に黄色に刻んだ南瓜を一杯にし蓋をした。

此の博勞の娘かと思う程可愛らしい子である。南瓜が佳味さうだといふと、こんなものが好きなのかと不審相に娘がいう。

不味いものが好きなら佐渡の婿になって十日も居るがいいと博勞が大きな口を開いて笑つた。炬の煙が娘の方に靡いたので娘は身を斜に反した。

「氷魚」のことから (185) 岡本八千代

今は、熊本、大分地方の大地震、余震がつづきたいへんな時である。なのに私は、「氷魚」の稿を書くこうとしている。申しわけない気持ちの動きながらも。

庭には卯の花（空木^{ウツギ}）が咲き出した。まっ白の蕾、まっ白の花が風の中。

○卯の花をめぐりてきたか時鳥^{トビ}

○卯の花の散るまで鳴くか時鳥
の子規の俳句を思い出す。ホトトギスは、血を吐いても八千八声鳴かねば鳴き止まぬとの言い伝えがあるとか。

一方、子規の畏友漱石は、没後百年の文豪として、益々のブームとなつてゐる。しかし、英国にある「漱石記念館」は来年九月で閉館となるらしい。漱石が英国に滞在したのは明治33年（1900年）から約2年間。30代だった漱石は当時の日々を「もつとも不愉快の二年」と書き残し、帰国後に「坊っちゃん」などの代表作を発表したといわれている。現在の「ロンドン漱石記念館」の運営者は、恒松郁生さんと言う人で、大学の先生として、日本へもどられる予定とか。漱石資料は、約二千点もあるという。（中日新聞夕刊3月に依る）

さて、前回のつづき、——子規と漱石は漱石の借りた愚陀仏庵に住むことになった。漱石が二階に、子規が一階に。その様子を、子規没後の明治41年（1908年）9月1日発行の「ホトトギス」

（俳句誌）第11号第12号に漱石が載せた談話の口述筆記をここに書いてみる。

僕は二階に居る。大将は下に居る。そのうち松山中の俳句を遣る門下生が集まつてくる。毎日のように大勢来て居る。

僕は、本を読むこともどうすることも出来ん。尤も当時はあまり本を読む方でも無かつたが、とにかく、自分の時間というものが無いのだから、止むを得ず俳句を作つた。

と言つてゐる。しかし、漱石はこの時点において、俳句にはかなり関心があつたらしい。

明治28年（1895年）5月26日付で子規に宛てた手紙の中で、小子、近頃、俳門に入らんと存候。御閑暇の節は、御高示を仰ぎ度候。

と俳句の入門の決意を語つたのであつた。かくして、漱石も2500句余りも俳句が残つてゐるとか。また漱石は、

一体、正岡は、無暗に手紙をよこした男でそれに対する分量は、こちらからも遣つた。余は残つていないが、いずれも愚なものであつたに相違ない。

子規は階下の六畳の座敷に万年床をとつて寝たり起きたりもでき、次の間の四畳半もあつたという。漱石は教師として勤めていたので、月給日には、二階に上がる前に、子規の枕もとに「君に小遣いをやろうか」と二、三枚の紙幣を蒲団の下に敷きこんだりした。（余は、交際を好む者なり」の本を参考）

ことのはスケッチ (450) 今泉由利

『ラ・ナシオン』

大した目的があつた訳ではない。日本から一番遠い国に行つてみよう。自分の意志で、アルゼンチンへ行つてみた。

何を思うのでもないのに、とにかく涙がでてきて止まらない。半年間くらいは、毎日泣いて日が暮れた。

10階ほどの上空に仮住いをしていた。

「ラ・ラ・ラ・ナシオン」と呼ぶ声が地上からあがつてくる。「何だろう」。下りて行くと、新聞売りのおじさんだつた。

それからの日々は、新聞を買いに降り、辞書もて、新聞を読もうとする日々に変つた。

自身の自己流の翻訳は、ひとが言っていることと可成り異なることを自覚したけれど、自分自身には自己流を尊重した。

その思い出の「ラ・ナシオン」、アルゼンチンの新聞に今回ニノの訪日は「日本見聞録」となつて載つた。ほんとうにうれしくなつてしまったから、まず部分を、原文で掲載する。

Nino Ramella
PARA LA NACION
Domingo 24 de abril de 2016

Hay un punto en este planeta que habitamos que se distingue por sus contrastes, un lugar donde la esencia oriental convive con buenas y malas expresiones de cuño occidental, y la modernidad puede transitarse con ropas tradicionales de origen milenario. Ese aleph que combina opuestos sin provocar chirridos se llama Tokio, cuya área metropolitana es el núcleo urbano más poblado del mundo, con 36 millones de habitantes.

編集室だより【二〇一六年四月】

三河アララギ賞 山口千恵子様

彼の人にわれの思ひの届かざり沈丁花の香る傍ら

三河アララギの歌人として、長い過去も、現在も、そして未来へと、その時々風物と共にご自身を詠まれます。このように詠みたい、と憧れます。

○「帰りたくない」「もう少し」と、一秒でも長く、と居てくれたアルゼンチンの子達が帰っていった。

○アマゾン源流。最初の一滴。映像を見ていた。植村直己さんが、アマゾン川、筏下りをした頃の源流と、なんだか違う。探究が進んだのかな。

○3Dプリンターで作りだした、人間の心臓を使い、人間の心臓手術をする時代になった。

○大井町線、緑が丘へ吟行。かさねの主宰、喜仙さん三回忌。

東工大構内の、天も地もすべて桜の色となる、素晴らしい時空を俳句と吟じ、東工大の学食、精養軒にて「喜仙さんに献杯」。

○宇宙を単位の数字には「あきらめ」しかうかばないけれ

ど、43光年のケンタウルス座アルファ星まで、光速の5分の1の高速で飛んでゆく計画があるのだと。偉い！

○新宿、ゴールデン街が火事。友達の店があるから、びっくり魂消た。うろたえた。幸い、彼女の店は無事。こんな騒動で、友達のありがたさ、愛おしさ・・・沢山の感情がよぎる。

○飛鳥山、頂度八重桜のとき。豊かに、おおらかに・・・身も心も満される。

○飛鳥山博物館へゆく。王子に住むと決めた時、まずこの博物館に来て、大昔から、今に至るまでのこの辺りを知った。海からの貝の貝塚が沢山あること。旧石器時代からの生活のあと。固い石を打ち欠いて、目的に応じた「矢じり」が展示されている。

アルゼンチンのパタゴニアで見つけた「矢じり」とそっくり。地球的隔たり、人種の異なり・・・「人間って、考えることと同じなんだ」。

○漢詩研修会。

「廬山の瀑布を望む」李白。他三編。

作者の人となり、時代、環境・・・知り得ることは、すべて知り。詩の景色、表の意内に秘める意・・・

日本の、清少納言の枕草子、源氏物語、大鏡、などの文学に大きく影響を与えたであろうこと。

皆、知り得て、そして吟ずる。こんな興味深いことがあったのでした。

和菓子街道（116）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

姫街道(12)

越えてきた本坂峠を振り返りつつ林の中のを抜けると、嵩山宿に到着する。宿場の入口には「杉のむらだち下にて 幾重のぼりぬすせの大ざか」と彫られた江戸後期の歌人・香川景樹の歌碑がある。

幕末の姫街道の三河側の三大名物料理は、ここ嵩山の「木の芽和え」、この先の長楽の「まんじゅう」、欠間（御油宿手前の東海道との追分）の「玉寿司」であったが、残念ながらいずれも現存しない。

嵩山宿をあっという間に過ぎ、坂道になっている国道を延々と下って行く。と、右手に馬の頭を浮き彫りにした巨大な馬頭観音が現れる。この先、牟呂用水に架かる小さな小倉橋と、豊川に架かる大きな当古橋を渡ると、豊橋市から豊川市へと入る。

その名も「姫街道踏切」でJR飯田線・名鉄豊川線を越えると、



1000体以上の狐像がひしめく豊川稲荷の霊狐塚。

豊川稲荷の門前町付近に出る。せっかくだからお参りしよう。

豊川稲荷で心惹かれるのが霊狐塚だ。不気味なようでいて、どこか心安らぐ空間なのである。

お知らせ

△七月号の原稿は、五月三十一日（火）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yur188@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumi.yuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美